

歡喜と慶喜

中川 皓三郎

はじめに

仏教は、人間を「悉有仏性」と見る。だから人間は、どのような人も仏に成ろうとして生きているのであり、仏に成ることがこの世に人間として生まれてきたことの意味を完成させるのである。そのことを『大無量寿経』に説かれている「真人」^①という言葉を借りて言えば、「ほんとうの人間」に成ることと云っていいだろう。

『歎異抄』第十二条には、「本願を信じ、念仏をもうさば仏になる」^②とある。また、「念仏成仏これ真宗」^③という言葉もある。では、親鸞は、仏に成ることをどのようなこととして明らかにしているのだろうか。「我、他力の救済を念ずるときは、(略)我は実に此の念によりて、現に救済されつゝあるを感ず」^④という清沢満之の言葉を憶念しながら、そのことを『歎異抄』第九条における唯円と親鸞との問答を手がかりとしながら尋ねてみたい。

一

師の親鸞に問うた唯円の問いは、

念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん^⑤

というものであった。つまり、

念仏をもうしましても、天におどり、地におどるといふようなよろこびのころが湧き上がってこなくなりまして。また、いそいで浄土にまいりたいといふころも一向に起こらなくなりました。これはどうしたことなのでしょうか。

と問うているのだが、このことはいったい何を問うていることなのだろうか。

このことを尋ねるにあたって、はじめに親鸞と法然との出会いの事実に学びながら、「念仏もうす」ことが、私たちにおいてどのようにして成り立つのか。また、「念仏もうす」ものに成るといふことは、どのような意味を持つことなのかを明らかにしたい。

二

九歳のとき、得度して仏弟子に成った親鸞は、天台の僧としてひたすら「断惑証理」としてある仏道にはげんだと伝えられている。

ところが、二十九歳のとき、

山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ給いけるに^⑥、

と、『惠信尼消息』が伝えるように、「断惑証理」の仏道に破れ、比叡山を下りることになった。そのことは、

煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざる^⑦

と『歎異抄』に語られているように、「悉有仏性」と教えられながらも、仏に成る道が完全に閉ざされた煩惱具足の

凡夫の我が身に目覚めることであつた。そのことの絶望的な重さを示すものこそ、百日の六角堂参籠であり、「後世を折らせ給いける」とあることである。

さて、参籠九十五日目の夜が明けると、聖徳太子から夢うつつの中で聞いた言葉にはげまされるかのようにして、吉水に法然を訪ねることになる。そのときの様子を、やはり、また、『恵信尼消息』は、

後世の助からんずる縁にあいまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人にあいまいらせて、又、六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに、ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば、^⑤

と伝えてゐる。そして、このことを『歎異抄』は、

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。^⑥

と語っている。

このような懸命の聞法を通して親鸞は、法然の説く「ただ念仏」の教えに深くうなずき、『歎異抄』が端的に「念仏もうさんとおもいたつころのおこる」と伝えるように、念仏もうして生きるものに成つていったのである。

では、念仏もうして生きるものに成るとは、どのようなことなのであろうか。

念仏は、念・阿弥陀仏であるから、それは、

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

撰取してすてざれば

阿弥陀となづけたてまつる^⑩

と、親鸞が語るように「撰取してすて」ることのない阿弥陀仏の大悲のところに目覚めて生きるものに成るといふことである。そして、そのことを「我は、阿弥陀仏に南無するものなり」と称し現すのである。

親鸞が、長い比叡山での学びを通して目覚めることになった煩惱具足の凡夫の我が身とは、

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり^⑪。

とあるように、我執のころを離れることが出来ず、どこまでも自分の思い通りになることを追い求めて生きるものことである。しかし、我々は、死すべきものとして相対有限の我が身を生きている。また、他者との生活でもある。だから、事実どこにも思い通りになるものはない。結局のところ受け容れることの出来ないものを持つことになるのである。このように受け容れることの出来ないものを持つことが、苦しみのすがたであり、「生死」と語られる生の内容である。

そして、法然とは、すでに阿弥陀仏の大悲のところに目覚め、「我は、阿弥陀仏に南無するものなり」と自らの信を称し現わす念仏の人であった。その念仏の人・法然が、語る言葉を通して、このような「いずれの行にても、生死をはなることあるべからざる」「煩惱具足のわれら」のところに、「撰取してすて」ることのない阿弥陀仏は自らを顕現するのである。

そのことをよく現しているものが、

源空光明はなたしめ

門徒につねにみせしめき

賢哲愚夫もえらばれず

豪貴鄙賤もへだてなし^⑬

という和讃の言葉である。

なぜなら、この「えらばれず、へだてなし」という言葉こそ、阿弥陀仏そのものの顕現を語るものだからである。それこそが、「撰取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」と述べられる所以である。

三

では、「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざる」と語られるものところに、真実そのものである阿弥陀仏の大悲のところに目覚めるということが起こるのは、そこにどのような道理があるのであろうか。

親鸞は、『一念多念文意』において

「至心回向」というのは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御ころなり。「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたえたまう御のりなり。^⑭

と語り、

真実功德ともうすは、名号なり。(略) 一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり。法性すなわち如来なり。(略) この如来を方便法身ともうすなり。方便ともうすは、かたちをあらわし、御なをしめして衆生にしらしめたまうをもうすなり。すなわち、阿弥陀仏なり。^⑮

と語っている。そして、また、『唯信鈔文意』において、

「涅槃」をば、滅度という、無為という、安楽という、常楽という、実相という、法身という、法性という、真如という、一如という、仏性という。(略) 法性すなわち法身なり。法身は、いろもなし、かたちもましますさず。

しかれば、こころもおよばれず。ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのりたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけただてまつりたまえり。¹⁶

と述べ、

さらに、また、『教行信証』「証卷」において、

法性はすなわちこれ真如なり。真如はすなわちこれ一如なり。しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わしたまうなり。¹⁷

と述べている。

これらの言葉から教えられることは、本願の名号と言われる南無阿弥陀仏は、仏陀・釈尊が、それに目覚めることによつて仏陀に成ることの出来た真実（一実真如・真如一実）そのものが、その本願のゆえに、つまり、私たち凡夫をして、真実に目覚めさせようとして、南無阿弥陀仏と名告り、行（はたら）くすがたであるということである。

だからこそ、南無阿弥陀仏という本願の名号には、

しかれば、「南無」の言は帰命なり。（略）「帰命」は本願招喚の勅命なり。¹⁸

という意味があると語るのである。

しかし、それだけではなく、

「帰命尽十方無碍光如来」ともうすは、帰命は南無なり。また帰命ともうすは、如来の勅命にしたがうこころなり。尽十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。¹⁹

と語られているように、我々のところに成り立つ、その勅命に順うこころそのものが、また、南無阿弥陀仏であると述べられている。

「本願招喚の勅命」と語られる真実そのものからの呼びかけを聞くことによって、聞いたものの内に真実そのものが、南無阿弥陀仏と名告り出るといっているのである。

だから、すでに「我は、阿弥陀仏に南無するものなり」と、自らの信を表明して生きる、念仏の人の教える「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という言葉を通して、真実そのものである阿弥陀仏が、「ただ念仏して、我にたすけられよ」と呼びかけるのである。そして、その招喚の声に呼び覚まされて、「我、ただ念仏して、弥陀にたすけられん」と阿弥陀仏の大悲のところに目覚めて生きるということが成り立つのである。

このように念仏もうして生きるものに成るといふことは、生まれて初めて我々の堅い思いの殻が破れて、真実そのものに目覚めることであつた。だからこそ、「天におどり地におどるほどによろこぶべき」と語られるような経験なのである。

そのことは、『大無量寿経』下巻の初めに、本願成就の出来事として、

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。²⁰

と語られていることである。

そして、歡喜と語られる「よろこび」は、菩薩の初地が、初歡喜地と呼ばれ、「初地に於て正しく真如を証して」²¹とあるように、初めて真実そのものに目覚めることにともなう「よろこび」なのである。

唯円もまた、師の親鸞と同じように、念仏の人・親鸞との出遇いを通して、「ただ念仏」の教えに育てられて、念仏もうして生きるものに成っていったのである。つまり、「天におどり地におどるほどによろこぶ」という歡喜の経験を持つことになつたのである。

だからこそ、いつしかその歡喜のこころもおろそかになつてしまい、念仏をもうしてもよろこびのこころが沸き上がつてこなくなつたことを、これはどうしたことでしょうかと問い、また、いそいで浄土にまいりたいというこころ

も一向に起こらなくなってしまうことを、自分でも不思議に思い、どうしたことなのでしょうかと問うているのである。

ところで、この「天におどり地におどるほどによるこぶ」と語られる「踊躍歎喜のこころ」について、親鸞は、『一念多念文意』において、次のように述べている。

「歎喜踊躍乃至一念」というは、「歎喜」は、うべきことをえてんずと、さきだちて、かねてよろこぶこころなり。「踊」は、天におどるといふ、「躍」は、地におどるといふ、よろこぶこころのきわまりなきかたちなり。慶樂するありさまをあらわすなり。「慶」は、うべきことをえて、のちによるこぶこころなり。「樂」は、たのしむこころなり。これは、正定聚のくらしいをうるかたちをあらわすなり。

この親鸞の言葉によれば、歎喜という「よろこび」は、我々が、正定聚のくらしいをうることにかわつての「よろこび」であるということである。そして、『尊号真像銘文』には、

如来の本願のみなを信ずる人は、自然に不退のくらしいにいたらしむるをむねとすべしとおもえとなり。不退といふは、仏にかならずなるべきみとさだまるくらしいなり。これすなわち正定聚のくらしいにいたるをむねとすべしと。ときたまえる御のりなり。

とあるから、「正定聚のくらしいをうる」ということは、「仏にかならずなるべきみとさだまるくらしい」を獲得することにほかならない。

そして、また、『一念多念文意』において、至心信樂の願成就の文である「諸有衆生 聞其名号 信心歎喜 乃至一念 至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転」を解説して、

「即得往生」というは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。そのくらしいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。眞実信心をうれば、すな

わち、無碍光仏の御ころのうちに撰取して、すてたまわざるなり。「撰」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。^{②④}

と言ひ、また、これに引き続いて必至滅度の願文ならびにその成就文を解説して、

この二尊の御のりをみたまつるに、すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚をなるともとき、阿毘拔致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまう。即時入必定ともうすなり。^{②⑤}

と言ふ。つまり、「正定聚のくらいをうる」ということが、浄土に「往生をう」ということであり、「かならず無上大涅槃にいたるべき身となる」こととして語られている。

だから、「真実証」を顕す「証卷」において、「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る^{②⑥}」と明確に述べられているように、「必ず滅度に至る」という方向を持つ人生を獲得することが、「正定聚のくらいをうる」ことであり、それが浄土に「往生をう」ということなのである。

四

ところで、この念仏もうして生きるものに成ることにともなう「よろこび」について、さきほどの『一念多念文意』を見ても分かるように、親鸞は、「歓喜」という言葉で表されるよろこびと、「慶喜」という言葉で表されるよろこびを厳密に分けて問題にしている。

つまり、「歓喜」というよろこびについては、「うべきことをえてんすと、さきだちて、かねてよろこぶころな

り」と語り、「慶喜」というよろこびについては、「うべきことをえて、のちによるこぶこころなり」と語っている。だから、「歡喜」とは、我々が、えなければならぬものを遂にうる事が出来るに違いないと、事に先だつてよろこぶことであり、「慶喜」とは、えなければならぬものを遂にうる事が出来たのだと、えて後によるこぶこころであるというのである。

では、このように「歡喜」と「慶喜」の違いを区別するのは、いったい何を問題にしていることなのだろうか。

実は、唯円が師の親鸞に「念仏もうしそうらえども」と問うたことを、すでに曇鸞自身が問い、自ら答えている。その曇鸞の言葉を手がかりにそのことの持つ意味を尋ねてみようと思う。

曇鸞は、『論註』において、

「如彼名義欲如実修行相應」とは、かの無碍光如來の名号よく衆生の一切の無明を破す、よく衆生の一切の志願を満てたまう。しかるに称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかんとならば、実のごとく修行せざると、名義と相應せざるに由るがゆえなり。いかにが不如実修行と名義不相應とする。いわく如來はこれ実相の身なり、これ物の為の身なりとしらざるなり。

と述べている。つまり、「しかし、名を称え（阿彌陀仏を）おもいつづけることがあっても、無明がなおあって、願いが満たされることがないのはなぜかといえば、それは（如來の）実のごとくに修行しないのと、名名の義に相應しないことによるからである。どうして実のごとく修行しないのと、名名の義に相應しないことになるかといえば、（この無碍光）如來こそは、実相の身であり、衆生のためにこそ（仏になられたところ）の身である、ということをしらずにいるからである」ということである。

どういふことかというところ、曇鸞は、我々に称名憶念するということがあっても、如來の眞実に順つて修行することによって、本願の名号である南無阿彌陀仏の意味するものに相應するということがなければ、無明が完全に晴れ、志

願が完全に満たされることもないのである。そして、また、我々がどのようなことができるか、如来の真実に順って修行することの欠けたことになり、南無阿彌陀仏の意味するものに相應しないことになるのかについて、如来が「実相の身」であるだけでなく、「物の為の身」であることを知らないことだと答えている。

如来が「実相の身」であるとは、真実になつた身であるということであり、また、「物の為の身」であるというのは、衆生の為にこそ（真実になつた）仏に成られたところの身であるということである。そして、そのことを知らないということが、「実のごとく修行せざると、名義と相應せざる」ことなのである。

この曇鸞の言葉によって考えてみると、

念仏もうしそうらえども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそ
うらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん

と、師の親鸞に問うた唯円は、まさに念仏もうすということはあるのだが、念仏もうすということが、本願の名号である南無阿彌陀仏の意味するものに相應していないことを示すことにはかならない。

五

「尊号」ともうすは、南無阿彌陀仏なり。(略)「号」は、仏になりたもうてのちの御なをもうす。「名」は、い
まだ仏になりたまわぬときの御なをもうすなり。^{②③}

と『唯信鈔文意』にあり、また、「獲得名号自然法爾」の文には、

名の字は、因位のときのなを名という。号の字は、果位のときのなを号という。^④

とある。おそらく『大無量寿経』の法威発願の教説並びに『阿彌陀経』の名義釈に教えられてということであろうが、親鸞は、本願の名号に因果の区別のあることを見ている。

そのことは、本願の名号である南無阿弥陀仏は、真実そのものが、その本願のゆえに、どこまでも我々を目覚めさせようとして、「かたちをあらわし、御なをしめして衆生にしらしめ」ようと、自らを名告る名告りであるというだけではなく、その名告りを聞かしめることによって、我々の内に南無阿弥陀仏（我は、阿弥陀仏に南無するものなり）と自分自身を称し現すものを生みだすことを通して、いよいよすべてのものを等しく目覚めさせようと行（はたら）く名号であることを明らかにしているのである。

そのことを信国淳は、『光は竟に遠からじ』という講話の中で次のように語っている。

「我阿弥陀仏に帰命す」というその一念の浄信は、それがまさにそのように阿弥陀仏に帰命するものだということによって、実はまたそのまま阿弥陀仏の大慈大悲心をもって私ども衆生に関わらなければならぬものであり、私ども衆生のために阿弥陀仏の攝取不捨という衆生愛を成し遂げることを、阿弥陀仏そのものから命じられるものだけだということになります。^⑩

そういうことから、唯円の問いの持つ意味を考えてみると、そこには、確かに師の親鸞の教えに育てられて、堅い思いの殻が破れ、初めて真実そのものである阿弥陀仏の大悲のところに目覚めることができ、だからこそ、「天におどり地におどるほど」のよろこびを経験するということがあった。そして、そのことが、念仏もうして生きるものになるということであった。

ところが、そのよろこびが、いつの間にかおろそかになっていったということなのであるが、そこに在る問題を、親鸞は、

よろこぶべきころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。^⑪

と述べている。つまり、我々のところに「よろこび」をもたらず真実そのものは、実は十方衆生に遍満する真実であるにもかかわらず、そのことを忘れてしまっていると言っているのである。つまり、「よろこび」をもたらず真実そのもの

のはたらきを、自分一人のところに取り込んでしまっているということである。

だから、「うべきことをえてんずと、さきだちて、かねてよろこぶころなり」と語られる「よろこび」を経験したにもかかわらず、そのことによって「正定聚のくらいにつきさだまる」ことが、「必ず滅度に至る」という開けを持たず、「滅度」と語られる無上涅槃のさとりの歩みが始まらないのである。

つまり、先ほど真実そのものは、十方衆生に遍満する真実であるということと言ったが、真実に目覚めたがゆえに、目覚めた真実に支えられて、真実が、十方衆生に遍満する真実であることを証していく歩みが始まらないということである。

だからこそ、

よろこぶべきころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおほゆるなり。^④

とあるように、真実が煩惱具足の凡夫である「かくのごときわれら」に遍満する真実であることに目覚めることによって、そのことを証していく歩みが仏に成ることであり、「念仏成仏これ真宗」と語られていることである。

あらためてこのことに気づいてみると、親鸞が明らかにする仏に成っていく歩みは、仏陀・釈尊の三十五歳の菩提樹下の成道から、八十歳のクシーナガラにおける般涅槃するまでの衆生教化の人生と重なることに驚かされる。

だから、仏に成ることは、真実に目覚めるところから始まり、目覚めた真実の真实性を証す歩みとしてあるということである。

そのことは、清沢満之が、最後の日記の巻尾に、

無限大悲の如來に信憑するものは、皆な共に如來の寵児にして、互に兄弟姉妹なり。故に其の關係は、相愛相扶

の親情（如来回向の仏心、即ち大慈悲心を根本源泉とす）に出づべき也。これ我等の現在に於ける仏心の活動也。然れども、尚ほ相対有限の分位にあるが故に、絶対無限の相愛相扶は未だ発現する能はざる也。惟れ大悲回向の分限に於いて、互に相愛扶するを得るのみ。而して其の相愛相扶の行為は左の二則によるもの也。（求施原則）

第一則

爾の有する所は、求めに応じて之を施すべし。

第二則

爾の缺くる所は之を有する者に就いて求むべし。

と語るものも、我々のところに開かれる仏に成つていく歩みを、身をもって明らかにしたものである。

- ① 『仏説無量壽經』『真宗聖典（以下『聖典』と略記）』七四頁
- ② 『聖典』六三一頁
- ③ 「浄土和讃」『聖典』四八五頁
- ④ 「他力の救済」『清沢滴之全集』（法蔵館）第六卷五八頁
- ⑤ 『聖典』六二九頁
- ⑥ 『聖典』六一六頁
- ⑦ 『歎異抄』第三条『聖典』六二七頁
- ⑧ 『聖典』六一六―六一七頁
- ⑨ 『聖典』六二七頁
- ⑩ 『聖典』六一六頁
- ⑪ 「浄土和讃」『聖典』四八六頁
- ⑫ 「一念多念文意」『聖典』五四五頁

- ⑬ 「高僧和讃」『聖典』四九九頁
- ⑭ 『聖典』五三五頁
- ⑮ 『聖典』五四三頁
- ⑯ 『聖典』五五四頁
- ⑰ 『聖典』二八〇頁
- ⑱ 『教行信証』「行卷」『聖典』一七七頁
- ⑲ 『尊号真像銘文』『聖典』五一八頁
- ⑳ 『聖典』四四頁
- ㉑ 『華嚴經探玄記』『国訳一切経』経疏部八・九七四頁
- ㉒ 『聖典』五三九頁
- ㉓ 『聖典』五一三頁
- ㉔ 『聖典』五三五頁
- ㉕ 『聖典』五三六頁
- ㉖ 『聖典』二八〇頁
- ㉗ 「信卷」『聖典』二二三―二二四頁
- ㉘ 『解説浄土論註』（東本願寺）下巻一二頁
- ㉙ 『聖典』五四七頁
- ㉚ 『聖典』五一〇頁
- ㉛ 『いのちは誰のものか』（柏樹社）一五四頁
- ㉜ 『聖典』六二九頁
- ㉝ 『清沢満之全集』（法蔵館）第七卷四八八―四八九頁